

せ と る C. E. T. L. *Quarterly*

教育・学習活動支援センター広報 No.11

発行日 17. July. 2003

巻頭言 授業公開をめぐる三つの個人的な感想

教育・学習活動支援センター長 坂本 辰朗

1. 学生時代、時間割の空き時間を利用して、他大学の授業を“盗講”に行くことに熱中した時期がありました。私の通っていた大学が文字どおり都心にあったので、このようなきわどい芸当ができたわけです。ある日、四谷にあるS大学のT先生の授業を聴こうと、大教室で待っていますと、T先生が和服を召されて出てこられました。私の大学には女性の教授はほとんどいなかったということもあり、また、大学で着物姿の女性に出会うという珍しさもあり、おやおや、と思った次の瞬間、教室の空気が一変したことに、さらに驚かされました。

「教室の空気が一変した」とはどのようなことでしょうか。別に、T先生が権威主義的な態度で授業に臨まれたわけでもありません。ごく自然に授業を開始されました。とりたてて新規な教授法が使われたわけでもなく——随時の板書を交えての普通の講義をされました——私が母校で聴き慣れてきた授業とさして変わらないはずなのです。しかし、最初から最後まで、教

室にいる人々が一体となり、質疑応答はきわめてわずかで、ディスカッションはまったくおこなわれなかったにもかかわらず、明らかに学生と教師のコミュニケーションが成り立ち、授業を創り上げていました。講義題目は私にとっては自身の専攻からははずれたもので、すべてが理解できたとはとても言えないのですが、それでも、自分がこの授業に参加しているという共通感覚をいやが上でも実感させられました。帰りの電車の中での余韻は、極上の音楽会の後のそれであり、聴きに来てよかったと思うと同時に、大学の授業とは何であるのか、すっかり考えさせられてしまいました。私が現在、自身の専門の一つとして大学論を研究しているのも、振り返ってみれば、このような経験があったからなのかもしれません。

2. 次は、私の失敗談を書くことになります。昨年一年間、在外研究でハーバード大学に滞在しました。研究だけをしていればよい身分でしたので、研究の合間、学士課程から大学院課程

まで、興味のある授業をいくつか聴講することになりました。

たまたま、私の専門にしているテーマそのものを扱った歴史関係の授業がありましたので、興味津々に聴講にいったのですが、どうもおもしろくありません。聴いているといらいらしてきて、心の中で文句を言い始めました。

——むちゃくちゃな板書の仕方だ！もっと筋道を立てて分かりやすく書いてほしいな——

——何でこんな些末な事項をいちいち取り上げるんだ。興味深いエピソードとして、学生の読書にまかせておけばいいじゃないか——

——また、あの学生がディスカッションで長々としゃべっている。いい加減にストップをかけないと、最後まで行かなくなるぞ。…ほらほら、やっぱり時間切れになった。本日のこの必読論文は別の機会に扱いたいだって？それは先々週も聞いた言い訳だ！——

と、こんな風に不満だらけで何回か出席した後、もう出るのを止めようかと思っていたある日の授業中に、自分が何と愚かで傲慢なことを考えていたのか、はっと気づいて、文字どおり赤面してしまいました。

学生と教員は、一つのコースを、ともに学び教えてきた間柄ですので、それぞれの学習なり教授なりを評価できるわけでしょう。学生が教員の授業を——たとえば、板書の仕方の巧拙を——コース全体の中で評価することも可能でしょう。しかし傍観者にとって、たまたま見たある授業を一つずつ要素に分解して、構成、取り上げるべきトピック、板書などなどを“評価”

することは——その昔に視学官がやったような不遜なことは——果たして許されることなのでしょう。同僚として当の教員とともに授業の設計段階から関わっていないかぎり、そのようなことは不可能なはずです。授業を要素に分解すると、授業全体に働くダイナミクス、あるいは授業全体に浸透している雰囲気というものを捉えそこなうことになります。しかし、これこそが一つの授業の肝心要なのではないでしょうか。当然のことながら、それは厳密には再現不可能なものでしょう。

3. 教育・学習活動支援センターからの提案
がもとになり、この6月から、創価大学でも授業公開が始まりました。この制度が立ち上がるまでの経緯を書くのは本稿の目的ではありませんので省略いたしますが、私が当初考えたことは、授業を公開・参観することで、今一度、大学の授業の底知れぬ魅力と不可思議さをお互いに確認したいと思ったからです。

私はどうも心配性で、現在の日本でおこなわれている大学教育“改革”に一抹どころではない不安を抱いています。日本の大学およびその教員がこれまで、系統だった外部評価を受けずにきたことは事実としても、だからといって、「どんな評価でもあり」、「何でも評価可能」という暴論は断じて受け入れられるものではありません。特に、授業については、要素還元的かつ行動主義的な立場で評価するのが“先端的”であるというような言説がまかり通っているように私には思えます。挙げ句の果ては、授業の善し悪しの問題が、“最新の”教授技術の修得云々

の問題へとすり替えられ、授業の“秘訣”なるものが何やら秘儀のようにもてはやされる——これは果たして私の杞憂というものなのでしょうか。やがては、どこかの機関が“望ましい大学授業”“大学授業で使用されるべき技法”なるものを全国的基準として提示し、そのための事実上の義務的研修がおこなわれる、という悪夢すら見る可能性があります。

同僚の授業を見学して何が学べるのか——こ

の問いに対して、私自身は、「授業を構成する個々の要素以上に重要なもの、すなわち、授業はその教授者と学生が共に創ってゆくという事実を確認すること」と答えたいと思います。そしてこのことは、授業公開が開始されて以来、幸いにして私が見学することができた、何人かの先生方の授業で見出したことと一致するものでした。

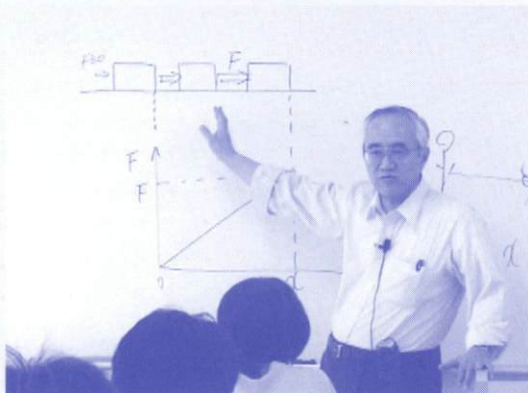
本年度1回目の授業見学会を開催

山本 英夫 教授（工学部長）の「自然科学序論」の授業見学が、7月4日（金）に開催された。1限の授業にもかかわらず、多くの先生方がK101教室を訪れ、山本先生の授業を参観した。

本年度は経済学部が授業公開週間を設けるなど、全学部で授業改善の努力が積極的におこなわれている。授業見学をとおした教員相互の交流は、授業の組み方や教材の提示など、教員の授業スキル向上の契機になるものと期待される。

ここでは、山本先生ご自身の感想と参観され

た関田先生の感想を紹介しよう。



山本 英夫 先生の感想

工学部でも高大接続問題に悩んでいる。専門科目の履修には高校レベルの数学・理科の基礎知識の不足は致命的である。入学許可を出した側の責任として、我々が補うしかない。

物理は暗記ではない。現象を理解し、イメージすることである。高校からの履歴もあって、

受講生33人の習熟度（理解できずに止まっている場所）はまちまちであり、個々のブレイクスルーのためには授業以外の個別対応が必要である。来年は個別自習プログラムを作ろうとか、見学会を機にいろいろ考えてみた。有益であった。

授業見学会に参加して

教育学部 関田 一彦

山本工学部長の「自然科学序論」を参観しました。授業は力学的エネルギー（“仕事”の物理的概念）に関するもので、20数年ぶりに聞く物理の話はとても新鮮でした。

履修者は環境共生工学科の1年生で、高校「物理」レベルの基礎知識が不足していると判定された学生でした（ざっと数えて25名くらいでしょうか）。ほとんどが始業のチャイム前に着席し、静かに授業が始まって行きました。はじめに30分くらいかけて前時の復習を行い、仕事＝力×距離という考え方と、その単位であるジュール（ $1 [J] = 1 [N] \times 1 m$ ）について図解されました。ここで大変に興味深かったのは練習問題として指定した問いが、学期はじめの基礎力判定試験に用いたのと同じ問題だったことです。この練習問題が解けるかどうか、というのがこの授業の成果を測る指標の一つなのです。参観者のいるところで、これは非常に勇気の要る指示だと思います。その後、仕事をする能力としてエネルギーを捉えることを解説し、重力による位置エネルギーを計算する練習問題の解法を

2通り示したところで授業が終わりました。

ところで高校までの数学や物理では、例題の解法を示したあとは理解が確かになるまで練習問題を繰り返すことが多いと思いますが、この授業では復習のための問題も含めて学生が解くことを要求されたのは3題だけでした。果たしてこの授業だけで学生は十分に理解したのだろうかと心配でしたが、山本先生は涼しい顔で30間ほどの宿題を科したのです。この分量が多いか少ないか判断できませんが、学生は文句も言わずに取り組んでいるようです。（授業終了後、2名の学生に理解状況を聞きましたが、2人とも物理は大学で初めて勉強しているので大変だけど、一生懸命付いて行ってます、という答えでした。）さらに、この授業にはTAが付きましたが、彼が放課後に補習授業を行っています。この授業を通して、大学における物理の基礎は必ず身に付けさせるぞ、という教員の、そしておそらくは学部の強い意志が感じられた授業でした。

前期に授業公開を希望された教員は次のとおりです。詳細はCetI滝川まで（内線2146）

- 〈経済学部〉 勘坂 純市 長谷部 秀孝 馬場 善久 高橋 一郎 大槻 幹郎 北 政巳 高木 功
神立 孝一 寺西 宏友 小林 孝次
- 〈文学部〉 山崎 純一 石神 豊 宮田 幸一 坂井 孝一 金子 弘 三井 啓吉 藤沼 貴
中村 泰朗 村手 義治 石原 忠佳 李 燕
- 〈経営学部〉 渡辺 隆之 金子 武久 岡田 勇
- 〈教育学部〉 坂本 辰朗 関田 一彦 清水 由朗 園田 雅代
- 〈工学部〉 山本英夫 田口 哲 青山 由利 坂部 創一 伊藤 祐子
- 〈通信教育部〉 西浦 昭雄
- 〈研究所〉 小出 稔

FD講演会報告 — 大学教養教育の現状と将来

CETL主催の講演会「大学教養教育の現状と将来」が、さる5月26日（月）A427教室において立川 明 教授（国際基督教大学）を講師にお迎えして開催された。

立川教授は教育哲学・教育史を専門にしており、とくに大学教養教育について多くの論文を発表されている。この講演では、その研究成果から、今後の教養教育の展望が示された。

大学教育改革はロースクールやビジネススクールにみられるように、大学院レベルの専門教育が重視されている。しかし、そのような専門性を追求するためには、深く充実した教養が身に付いていなければならない。最近では、9割



を超える国立大学が、教養教育の改善の方針を打ち出している。

本学では来年度より法科大学院設置が決定されている。この意味からも、大学教養教育のあり方を模索し確立するのは重要な課題であると思われる。

〈講演の所感〉

新しい教養教育のあり方を求めて

法学部 高村 忠成

常日頃から、主として法学部一年生を対象として『国際政治論』を講義しているので、立川教授の講演を大変に興味深くうかがった。というのも、『国政政治論』という一見つかみどころのない科目を担当している私にとって、学生には世界史や日本史の基礎知識をもってもらいたい、また政治や経済の最低限の仕組みを知って欲しい、と日常から要望しているからである。周知のように、近年のとくに高校教育は、歴史にしる社会にしる、細分化されていて一人の高

校生が世界史も日本史も知っているということはあまりない。ところが『国際政治論』という科目は容赦なく、世界史、日本史、地理、社会などの知識を要求してくるのである。しかも、大教室での大勢の学生を相手にしての講義という形である。こういう条件であるから私としては、必然的につねに教養とは何かという問題に関心をもたざるをえなかった。そのような折、立川教授の講演をうかがって、私は心強い刺激を受けることができた。その主な点を2点だけ

紹介しておきたいと思う。

ひとつは、高校教育という前提はあるにしても、大学には大学でしかできない根本的なものを教えるのが大学での教養教育である、という示唆であった。私も大学教育の根本は知識を詰め込むことではないと思う。この示唆をもとに、私は『国際政治論』を通して、大学ならではの“何か”を学生に与えられるような講義を試みようと思った次第である。

もうひとつは教養教育は、できれば少人数が理想であるが、ある面では学生数などの規模に

は関係ないという指摘をされた点である。たしかに少人数であるのは理想的である。しかし、さまざまな条件により時にはそれが不可能な場合もあるだろう。だがそのときにこそ教員の力量が問われるのではなかろうか。私の学生時代にも、大教室であるにもかかわらず、つねに刺激的な講義をされる教員がいた。いつも教室は学生であふれていた。それを思い出すと、教養教育で問われているのは「教員教育」かもしれないと身が縮む思いがした次第である。

講演を聴き終えて

文学部 石神 豊

立川教授の講演は、OHPを用いたビジュアルなものであった。少々説明が早く、こちらが考える時間の余裕がなかった感じでしたが、氏の勤めるICUでの事例や数値は説得的であった。私として関心をもったものは、リベラルアーツの中身である。これは本学でも、今後さらにその充実を考えていかなければ問題である。

リベラルアーツの授業形態としては、アメリカの大学においても評価基準とされ、氏の経験からもいえることだとされたが、20人以下のクラスが望ましいということであった。しかし、教員数や経費の面でなかなか難しく、ICUでも最近はその割合がかなり落ちてきているということであった。内容としていえることは、現代の学生は、異文化体験や生きた経験に興味を示すということ、その点、留学は思わぬ成果を収めることがあるということを述べられた。また、

古典の学習は生産的要素があるということ、さらに理論を考えることも必要だとされた。

私として、学生指導のありかたと、氏の考えるリベラルアーツにおける理論とは何かを質問させていただいた。氏は質疑の中で、教養とは「to lay the foundation of a superior education」だといわれたが、これは本学の人間教育からいえば、かつて創立者が入学式でいわれた「歴史への眼を磨け」「自己開発の方途を身につけよ」「大いなる理想へ挑戦せよ」との指針に、その内容がみごとに示されているのではないかという思いをもった。

現在、「教養」が再び見直されているが、本学にはすでに創立者の大きな指針があり、あとはその実践をいかにするかということが私たち教員の課題ではないだろうか、と講演を聴き終えて考えた。

より良き大学教育を目指して

短大英語科 南 紀子

I C Uでは、全教員がacademic adviser として院生や多学科の学生や留学生を学問的に支援しているそうである。立川先生は、本年、女性22名、男性11名の33名を担当。学生の出身地は米国1名、東京6名、他府県26名で、学科別では教育学科15名、国際関係学科14名、人文科学科2名、社会科学科2名とのことである。事務局が設定した学生と教員のマッチングが必ずしもうまく機能せず、先生方が御苦労されているというお話も伺った。

わが創価女子短期大学でも、開学以来同様の制度が行われ、教員が担当する学生は自分の所属する学科の学生五十数名で、担当期間は入学してから卒業するまでの2年間である。担当学生数はI C Uより20名ほど多いけれども、我々には学生とのマッチングで苦しむという問題はほとんど無い。

その理由として、第一に、担当している学生とは授業で最低週1回は会えるように時間割が組まれている。そのため、授業を通して学生も教員も徐々に相互理解を深めていくことが可能である。第二に、月に一度90分の授業時間を利用して、有意義な学生生活を送れるようStudent Group Meeting（通称SGM）を開催しているからである。このSGMでは、Group内で選ばれた正と副のリーダー2名が中心となり、積極的にGroupの学生同士の友情を深め、担当教員も参加

して学生主体のSGMを見守り、SGMの最後や運営準備中に助言や支援を求められる。更には、事前の約束が無くても、授業の無い時間や放課後を利用して、ゼミやGroupを問わず、教員の研究室を訪ねやすく、勉学以外の相談にも親身に応じている先生方が多いのは、学生にとって、安心して学べる環境が整っているといえよう。

紙面が限られてきたが、カリキュラムのあり方として、I C Uに学びたいと感じたことに「教養学部教育の本来目指すゴールは、学生が自分の履修するプログラムを受身的に大学に決めてもらうのではなく、学生一人ひとりが自分の関心に基づいて、自分の進むべき道を自分で選べ、決めていけるようにしていきたい」との考え方であり、学生の学習と進路について相談を受け助言を行うacademic adviserと学科長の役割は重要であると痛感した。学科間のカリキュラムの垣根が低く、履修しなければならない科目の縛りがあまりなく、学生にとって興味のある学びたい学問を学べる機会が用意されていることに感銘を受けた。



Information

教員用Webが開設

Cetlのホームページに新たに教員用ページが開設されました。有益な情報を満載しておりますので、是非ご覧ください。<http://www.succ.soka.ac.jp/CETL/t-only/>

教育・学習活動支援センター ワーキングペーパー・シリーズ刊行のお知らせ

教育・学習活動支援センターの活動は、学生の学習支援と教員のFD活動を目的とし、日常の問題を地道に解決するよう努力しています。しかし改革に必要なのは、中・長期的な課題の視野をもつことです。センターでは今すぐに着手できない課題ではあっても、解決の萌芽を育てることを目的として、CETLワーキングペーパー・シリーズを発刊しました。

すでに2冊のワーキングペーパーが刊行されています。

安野 舞子 (UCLA博士課程在学)

『リーダーシップと精神性：社会変革を目指す米国の
学生リーダーのケース・スタディー』

井上 比呂子 (日本学術振興会特別研究員)

『大学職員養成プログラムの研究：桜美林大学大学院
大学アドミニストレーション専攻への訪問調査報告』

ワーキングペーパーに関するお問い合わせは、教
育・学習活動支援センター、滝川 (内線2146) まで。



CETLの窓口業務のお知らせ

後期の受付業務は、9月16日(火)からです。火曜日～金曜日までの12時30分～17時。

編集後記

立川先生の講演を聞いて、「教養とはなにか」を考えさせられました。人のどんな姿に教養が滲み出るのか。人間教育を標榜する創価大学は教養の具体的姿を求める努力を惜しんではならないと感じました。(U)

C. E. T. L. Quarterly No. 11

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel: 0426 (91) 9782 内線 2148

E-mail: cetl@soka.ac.jp